

JACTFL 第7回シンポジウム「外国語教育の未来を開く」

分科会報告:「外国語教育の多様化の実現に向けて」

分科会2 実践報告(2)

堀内 貴子

本分科会では、4つの報告が行われた。以下にそれぞれの発表の骨子と質疑応答を報告する。

1. 「複数言語の並行学習による効果—これまでの研究成果を振り返って—」

発表者: 吉川 明希(株式会社 エアクレーレン)

(代理) 松下 幸宏(株式会社 エアクレーレン)

本発表は、eラーニング教材を制作し、それをもとにした複数言語の並行学習による効果に関する調査研究に関するものである。2007年から日本教育工学会で発表してきた学習サイトの概要と複数言語の並行学習の調査をもとに、教材とその効果についてまとめた。

語学研修サイトを作成しているのは、Innovative Language Learning というエアクレーレンのグループ会社で、各言語および文化を学べるデジタルコンテンツの提供と語学教育・社内研修プログラムの提供を2本柱にしている。インターネットを利用してレッスンの配信を行っており、オンラインサービスで最初に開発されたのが、英語圏の学習者に対して日本語や日本文化を学んでもらうための JapanesePod101.com である。その後、SurvivalPhrases.com として、現在では34言語の教材を作成しており、様々なレベルやニーズに対応できるようにしている。これらは、2018年8月頃1億ダウンロードを達成、レッスン数は3万6千レッスン、週に2~3レッスンずつ更新を行っている。YouTubeでも配信を行い、700万人が登録している。特徴としては、四季や慣習に合わせていること、レッスンを受けるだけでなく、PDF教材などの副教材も提供していることである。さらに、これらの教材をもとに語学教育プログラムとeラーニングプラットフォームの提供も行っており、学校や社内研修等でも使用されている。

複数言語の並行学習については、2007年から、2011年を除き、日本教育工学会で発表を続けている。最初の2年は教材の紹介、その後、効果についての報告を行っている。レッスンごとの統計をとって、アクセス頻度を出し、アンケート調査などで生徒から

の要望を聞き、改善を行ったり、使用後の効果を測定したりした。効果については、最初は単言語の結果であるが、2011年以降は複数の言語を学習した場合の効果についての調査を行った。アンケートにより、複数言語を学ぶことで、飽きることなく、言語の学習が続けられる、能力の伸びが見られる、といった結果が得られた。今後は、まだ調査を行っていない言語や国について調査を広げたいと考える。

質疑応答：

語学教材のレベルと対象について教えて欲しい。

—2007年の開始時には小中学生を対象に教材を制作し、入門と初級コースのみだったが、現在は社内研修、ビジネスで用いられる教材の開発も行き、また幼児教育にも幅を広げ、レベルも中級・上級と増やしている。

外国人はこのような教材を使って意欲的に学習するが、日本人は挫折率が高いとかあまり続かないというイメージがあるがどうか。

—海外の定着率のほうが圧倒的に高く、日本での知名度は上がらない。ただ、これは日本人の挫折率が高いのか、日本人に教材があわないのかは分からないので課題になっている。今まで、言語を増やすことに力を入れてきたが、今回はそちらについても発表をしたい。

1つの外国語を勉強して得られる効果と同時に複数言語を勉強して得られる効果を比較して、複数言語の方が高いのはなぜか。

—相乗効果があるのではないか。飽きずに学習ができ、1つの言語学習で行き詰った場合に別の言語を介することでモチベーションがあがるという声があった。しかし、これは母数を増やし、統計的に判断したほうがいいので、現在検討中である。

モンゴル語と日本語は言語に近いが、「言語が近い/遠い」ではどのような効果があるのか。

—細かいところは不明だが、近い言語であるとか、中国語と日本語には漢字が共通だからといった声があったが、実際には漢字は共通でも文法は違うので、さらに調査をする必要がある。

2. 大学の世界展開力強化事業(ロシア)

「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム(筑波大学)」の成果と課題」

発表者: 臼山 利信(筑波大学)

松下 聖(筑波大学)

「大学の世界展開力強化事業」とは、①国際的に活躍できるグローバル人材の育成、②大学教育のグローバル展開力の強化、③日本人学生の海外留学と外国人学生の戦略的受け入れを行う事業対象国・地域の大学との国際教育連携の取り組みの支援という3つの目的で、平成23年から文部科学省が開始したものである。この事業は採択されると5年間、文部科学省から財政支援があるが、年々予算額が減額されていき、5年間の支援終了後は自走化(大学が文部科学省の財政支援がなくとも事業を続けること)して事業を行うことが前提とされている。本発表では、平成26年度ロシアの大学との間で実施する事業として採択され、今年度が最終年度で4月より自走化を行う世界展開力強化事業(ロシア:第1期)の筑波大学の取り組みについて報告が行われた。

このプログラムは「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」という名称で、日本とロシア語圏を自在に行き来し、自立的に活躍できる実務型人材養成プログラムである。平成26年度の間評価では、最高ランクのS評価を獲得した。筑波大学では、15か国41大学・1機関と交流を実施し、具体的には、交換留学と研修を行った。研修は海外研修、医療実務研修、日本語・日本文化研修の3つに分かれている。これらで養成する人材は日本とロシアに精通しており、少なくともロシア語・日本語・英語、あるいはさらにウズベク語やカザフ語などの現地語をも使い活動できるグローバル人材である。

交流実績としては、派遣・受け入れ人数ともに5年間で目標を大きく上回り、計578名となった。交換留学生は、現地の大学に通うだけでなく、インターンシップなども行う。医療分野で派遣と受け入れを合わせて99名の交流を行い、受け入れでは、医学生を筑波大学の付属病院でインターンとして受け入れた。派遣では、様々な国への視察研修を行ったり、年間1~2名の医学生が、ロシアでインターンを行ったりした。その他、海外インターンシップなど、様々な取り組みを行った。進路については、筑波大学を卒業した学生は、マスコミや一般企業に就職したり、大学院に進んだりしている。ロシア語関係に就職した学生もいる。いずれも難関を突破しているのも、プログラムの一定の成果だと考える。留学生は、大学院に進学した学生がいたり、日本で企業に就職したりし

た学生もいる。プログラムに関する研究を社会に向けて発信することも意義のあることだと考え、行っている。

課題は①自走化、②人材のネットワーク化、③教育モデル化、④評価方法の確立の4点ある。①は学内予算が減る中、外部予算の獲得が難しい。②は同窓会文化がなく、卒業後の進路先を隠す傾向のあるロシアでは、調査が難しい。③はノウハウ等の提供はできるのでモデル化は可能であるが、マンパワーと予算を揃えることが壁になり、難しさがある。④は人材についてプログラム以前と以後の成長度合いを客観的に測るのが難しい。言語能力に関しては検定試験などで可能だが、実務能力をどう伸ばしたか、グローバルマインドが修得できたか、インターンシップでどの程度の能力を身につけたか、を客観的な指標で示すのが難しい。4月以降は2つの事業に分けて展開する予定である。

質疑応答：

学生には留学後、どのように課題を出していたか。またその課題がどのように就職活動等につながっていたか、それも教えて欲しい。

一学生は、1か月以上のインターンシップを行う。また駐在員の方々を巻き込み、経済フォーラムを行うことが必修化されている。さらに、帰国後、報告会にてどのような科目を取り、どんな勉強をしたか、インターンシップではどんな活動をし、どんな成果を得られたか、経済フォーラムでのどのような企画をし、どのような成果を得られたのかについて、1人15分程度で発表する。その中で、自分が留学中にどう変わったかを述べる。プレゼンテーション能力の向上は大きい。また中間報告書や最終報告書も作成している。教員側からは、きちんと予算も手間暇かけて教育を行えば結果が出ると実感した。

ロシアにおいて、相当勉強をしていると思うが、どのようなサポートを行っているのか。一留学の前年度から、様々な研修を行う。内容は現地の生活についてや言語について。また帰国前にも、ロシア語や英語についてしっかり勉強を行い、検定もとるように指導をする。また様々な専門分野を持つ学生がいるので、自分の専門に関してはしっかり勉強してくるように指導する。もし、体調不安等がある場合には帰国を促す。「よく遊び、よく学べ」と伝えている。

3. 「看護系大学における「複言語学習のすすめ」の試み」

発表者：岩居 弘樹(大阪大学サイバーメディアセンター)

李 銀淑(大阪女学院大学国際・英語学部)

大山 牧子(大阪相額全額教育推進機構)

本発表は、看護系大学で実施している「複言語学習のすすめ」という授業についてである。前身の授業として、博士後期課程のプログラムにおいて、インドネシア語・トルコ語・ベトナム語の3言語を5名程度で行ったものがあるが、今回は多人数で実践を行った。

「複言語学習のすすめ」は、音声を中心にしたトレーニングを通し、外国語を学ぶための基礎的な能力を身につけることを目的とした授業である。この取り組みのベースにあるのは、「体験を通して学び方を学ぶこと。学びのきっかけをつくること」という考えである。日本は既に多言語多文化社会である。しかし、言語サポートに関しては遅れている。特に、日本語も英語もわからない言語的に弱い立場である人にとって、患者として病院を訪れると困ることがある。その際に一言母語で話しかけてもらえるようなことがあると、信頼関係を作る一歩になるかもしれない。そのためにも、医療従事者となる学生に、複数の言語を学ぶきっかけを作り、異文化に対する受け入れの下地を作っておく。

授業の概要は、次のとおりである。対象は大学1年生、1 Semester 15回の授業で、インドネシア語・韓国語・ドイツ語の3言語を5回ずつ学習する。91名の学生を3つのグループに分け、それぞれのグループ別に言語を学ぶ。授業は「留学生+ICT」を売りとした。留学生にチューターとして入ってもらい、さらにICTは学生が所有するスマートフォンを活用した。活用内容としては、出席確認や資料配布、発音練習のための音声認識アプリや、語彙学習アプリを使いながら音声を中心に学習を進めた。また、授業後には、学習成果を動画に撮り、アップする。発表では、授業内で学んだ内容について(具体的には挨拶や自己紹介、フレーズを使った会話、授業中に覚えた歌など)復習という形で受講生が実際にアップした動画が紹介された。動画を撮る際、学生は簡単なシナリオは作成するものの、紙を見たりするのではなく、しっかり覚えているのである。またこれらの動画をアップすると、自分以外の学生の動画も視聴することが可能である。アップされた動画は1,022本で、視聴回数は14,856回と、かなりの頻度で視聴されおり、関心が高かったことがわかる。

学生の感想としては、「最初はインドネシア語なんてまったくわからなかったけど意外と覚えやすかった」「言語の壁を超えることができると思う」「こんな短期間で3言語を身

につけられた自信が、他の言語を学ぶ土台になる」等、様々な感想が見られた。今後のステップに進めるきっかけになるであろう。今後は、クラスを増加し継続することが決まっている。また小学生を対象にした講座も開かれている。

質疑応答とコメント:

1 クラス 30 人に限定したこと、クラス規模について質問が出た。

実践では、自己紹介等が行われていたが、看護系の大学であるので、病院で使うフレーズ等はやったのか。

—来年度はやってみたい。

5 コマずつ 3 言語、ICT ツールを使っているがそれらの使い方についてはレクチャーしているのか。

—ほぼまったく説明はしていない。アプリを入れ、実際にやってみる。分からなければ、まず隣の学生、次に反対の学生に聞くというように指導したが、問題なく使っていた。

4. 「日本語話者はどのような経験をし、何を語るか —日本語話者の多様性理解のためのリソース開発の試み—」

発表者: 米本 和弘(東京医科歯科大学)

本発表は、カナダ日本語教育振興会、ヨーロッパ日本語教師会による「せかいの日本語みんなの声プロジェクト」内で開発を進めているリソースについての報告である。

プロジェクトの趣旨としては、これまで当たり前につけられてきた単言語話者、母語話者を中心とした一元的な言語観に疑問を投げかけ、多様な日本語や言語活動に対する柔軟な理解を育成・促進することである。多様な日本語使用者の「声」を集め、日本語に関する様々な考え方や経験について理解を促進できるリソースを開発、共有するとともに、それらを用い広く社会において多様な日本語使用者に対する理解を促進することを目的に行われている。日本語という言語は大半の話者が日本におり、日本語イコール日本人イコール日本という考え方が根強いが、実際には、母語話者の話す日本語、また非母語話者の日本語のどちらにも多様性があり、使用者も多様である。また、日本語自体、「World Japanese」や「やさしい日本語」等の議論も行われている。これらは、標準的な日本語を批判的に捉えることを共通としている。言語そのものだけではな

く、言語使用の状況、人と人との関係といったものに焦点をあて、言語活動をみていくべきだと考える。また、外国語＝英語という英語中心主義からの脱却の必要性、多言語や複言語への意識化も必要である。これらを踏まえ、多様な日本語や言語活動に対する柔軟な言語観を育成・促進すること、および、そのためのリソースを作成する。

リソースの開発としては、「想像」をキーワードに、多様な日本語使用者のインタビューを集めたウェブサイトを作成した。対象は国内外の留学生や地域在住の非母語話者、非母語話者と接触のある母語話者である。（発表内では、いくつか実際の動画について紹介があり、様々な日本語使用者がどのように日本語で活動を行っているのか解説がなされた。これらのインタビューは非母語話者であってもほぼ全て日本語で行われている。）

ウェブサイトの使い方としては、例えば留学生であれば、自分の来日経験をまとめる際の足掛かりや、人に話す際の参考とすること、日本語母語話者であれば、多様な日本語使用者がどのような経験をしてどのような気づきを持っているのか想像する助けにすることが考える。今後、さらにウェブサイトの充実を図る予定である。

質疑応答やコメント

インタビューの対象者は、何か国くらいの留学生なのか。
一言語数だけではなく、ジェンダーや年齢、日本語使用の理由などで、できるだけバラエティーを多くしようとしている。自分たちがアクセスできる日本語使用者というのは限られているので、できるだけ様々な人にアクセスしていきたい。

セキュリティー、個人情報の開示等は難しいと思うが、それについての方向性は。
一できるだけ広く使ってもらいたいが、倫理面には考慮すべきである。インタビューを受けた人には公開前に公開の仕方を確認するが、その時に「ここは外して欲しい」という場合には（公開後であっても）、調整を行う。

多民族国家のカナダと結びついた理由はなぜなのか。
一発表者がカナダで教えていたのがもともとの理由である。自分たちの学生が将来日本に行くことを想定すると、どのように日本社会で扱われるのかを知ることが重要である。

（東京成徳大学／明海大学）